

消費者を守るために、食に関しては遺伝子組み換えや外国産作物の安全性などの問題、また種々の製品に関しては不良品や危険品の問題、さらに偽装や悪徳商法の問題などが多くにわたっており、それぞれに取り組みがなされている。そこで私の役割としては、あまり扱われていないところで消費者問題を生活の視点からもっと枠を広げて考えてみたい。ここでは、食の安心安全について環境問題の次元までもちあげ消費者問題を振り返るというアプローチを模索したい。以下に述べる。

(1) まずは、農作物の在り方について。農業生産者の役割はもちろん安心安全の農業であることはいうまでもないが、それを実現させるには健全な自然環境があってのものであり、農業はその環境保全に大きな使命を有している。これは平地でも山野でも同じことであり、例えば中山間であれば農業は山を守っていることになる。こうしてみると環境で安心安全な農作物生産の構図は、河川に例えて水下という消費者から水上という生産者を支援することで、全体の環境が農作物を介して保全されることになる。この観点をぜひとも消費者問題に兼ね備えたいものである。

(2) では具体的にどうするのか。農業の方々とのコミュニケーションの場が商業者も含めてあって欲しい。さすれば、生産者・商業者・消費者の三者には購買を介して顔が見えることになり、信頼も生まれてこよう。それに、消費者の価値観が農業への理解として変わっていく。例えば。農作物について見栄えがいいとか食す際に手が汚れなければいいとかといった割合ご都合主義的な価値観が意味ある価値観にかわっていくと思う。ちなみに、泥付き野菜の泥は食には土壤であり農夫がいることを知らせるメッセージとも取れるようになろう。

まとめると。環境次元からの思考では、食文化について「食す行為」から遡って「つくる行為」までを消費者側でコミットする事になり、安心安全を含めて文化創生までもが使命となって、ヒューマンとしての充実さが何事にもかえがたく得られるといえよう。こうした視点で富山から発信し、実践が進むよう英知が機能して欲しいと願っている。